

氏名	有坂 ゆかり (アリスカ ユカリ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第6号		
学位授与日	平成17年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	<b>絵画の認識と可能性 — 制作者の視点</b>		
審査委員	主査 教授	本 江 邦 夫	
	副査 教授	建 畠 哲	
	副査 教授	諸 川 春 樹	
	副査 元本学教授	馬 越 陽 子	

## 内 容 の 要 旨

現在、映像や写真などのさまざまな表現方法が存在する中で、私は絵画を選択する意味を自らに問いかけながら制作する視点を持ちたく思い、博士後期課程においては、抽象化により意識外の認識が表現されている絵画に関して論考し、制作に当たった。博士後期課程一年次までの制作を、ルネサンス期から続く伝統的な絵画の流れを受けた、描くという純粋な試みの実践であったと仮定するならば、二年次からの、油彩画の可能性を模索するための新たな試みが表面化させた要素は抽象化として定義されるだろう。この抽象化によって意識外の認識を表現しようとする方向は、それ以前の、描くことにより精神性を表現したルネサンス期絵画の流れを汲む方向と衝突せざるをえず、その矛盾を起因として、現代と古典との間に内在する絵画の本質に関して、制作者側からの偏った個人的な見解ではあるが、可能な限りの論理化をめざす——こうした自己矛盾を契機として、この試論の執筆を思い立ったのである。

また、私にはかねてから人間の感情や概念などを絵画で伝えようとする場合に、抽象度の高いメッセージを含むことが、その伝達能力にどれほど関与するのだろうかという疑問もあり、制作に反映させたいと考えた。完全な抽象絵画をめざすのではなく、脳裏に浮かぶ形象や、絶えず変化する心像をどのようにとらえ、画面全体の均衡を考慮しながら具体的に形作るかという過程を、空間と形態との関係における抽象化の問題として模索している。明確な意図を意識的に伝達する手段として、言語ではなく絵画が選択される場合、画家自身における当初の意図と同時に、通常では感知できないような意識外の認識が視覚的に表現され、見る者に対して強い説得力を持つことが期待される。あるいはこうした意識的な抽象化が、鑑賞者の内面に刺激を与え、精神的な境地に至るプロセスを促す場合もあるだろう。

意識外の認識に関する示唆を与えてくれた、トール・ノーレットランダーシュ著『ユーザーイリュージョン——意識という幻想』（紀伊国屋書店刊）によれば、感覚が意識外でとらえた膨大な情報はほとんどが捨て去られ、意識的な枠の中で知覚できるわずかな情報だけが認識として残される。現時点では不必要であると判断された、無限の可能性を秘めた情報も淘汰されるが、取捨選択における個々人の相違を想像すれば、抽象絵画で表現される形象には、次元の異なる認識や世界の全く別の様相が未消化のまま理解された、未然形の思考が内在しているのかもしれない。さらに、視覚や聴覚といった感覚器官から脳に伝達する情報には時差があり、感覚器官の使われ方や意識として自覚する前に捨てられる情報の差異からも、絵画の特性が推測されるのである。絵画は新たな認識を伝達する手段でもあり、視覚に限定されているがゆえの可能性を内包した、観念そのものであると言えはしないだろうか。かつては教会を主とする建築物を飾るための役割を担い、教会は絵画によるインスタレーションの場でもあったが、ルネサンス期以降、建築物から取り出された絵画は、特別な自立した存在として、そこにすべての観念が封じ込められた。観念によって自立する絵画を否定するということは、伝統的な観念をも否定することになる。また、絵画を建築物から取り出せるということ自体も一つの観念であると言えよう。

ルネサンス期の画家たちは、美を介在とする認識によって自然や事物などにとらえ、具体的な対象物を描く行為の中で通常の知覚を越えた領域を具現化したが、教会主導型の宗教というカテゴリーなどによる共通理解が存在していた。後の印象派においては、描く対象物が共通理解そのものであり、それはルネサンス美術の様式に調整を加えたものだった。そして対象物を描いた絵画をどのように鑑賞すべきか、という鑑賞者側の既成概念を覆し、現在では正統的な絵画として認識されている。鑑賞者を想定せずに制作されるアウトサイダー・アートの作品には、芸術とは何か、という問題意識から生じる様式がなく、芸術として認められるための担保を持たない。鑑賞者との共通理解を持つという概念が欠落しているのである。これに対して、例えばニューヨーク・スクールを代表する作家の一人であるバーネット・ニューマンは、言葉によって作られた、言語の中で完結する共通理解を生み出そうとしたのではないか。本論文は抽象化の問題と合わせて、ルネサンス美術及びアウトサイダー・アート、印象派及びニューヨーク・スクールを題材とし、各様式を代表する作家について論じながら、意識外の認識が表現される絵画に関して、制作者の視点から考察するものである。